

# 北海道師範塾 塾頭通信

## 「教師の道」

第417号 平成24年10月19日

### ノーベル賞と洗濯機

昨日に続いて、今日もノーベル賞を話題にしようと思います。

山中京都大学教授のノーベル医学・生理学賞の受賞は、1987年の利根川進氏以来、25年ぶり2人目の快挙であり、心から嬉しく思います。最近は、内外ともに暗い話題の多い日本ですが、山中教授にノーベル賞というニュースを耳にしたとき、気持ちがすっと明るくなった、そんな感じがしました。

この山中教授に、田中文化科学大臣が洗濯機をプレゼントしようという提案し、新聞やテレビを賑わしています。それというのも、山中教授がノーベル賞受賞の一報を受けた時、自宅で洗濯機の修理をしていたからという事のように、教授の家に洗濯機を買い替えるお金が無かったという事でない事は、今更いう迄ありません。

まあ、田中大臣の向う受けを狙った思いつきと笑って済ませればそれまでではありますが、また、これに対して、政治家は寄付をしてはいけないという杓子定規な話もあって、ノーベル賞に比べると（比べるのも失礼ではありますが）レベルの低い話です。

今回の山中教授のノーベル賞受賞で良かったなと感じたことは、彼が、研究環境の整っているアメリカではなく、日本国内で研究を続け、そこで得られた成果が高く評価されたという事です。

山中教授は誠に謙虚で、「私は無名の研究者だった。日の丸のご支援がなかったら、素晴らしい賞は受賞できなかった。」といい、日本政府や国民、研究仲間に対して繰り返し感謝の言葉を述べています。徐々に、日本人らしい日本人を見た気がします。

また、座右の銘は「ビジョン・アンド・ハードワーク」と「人間万事塞翁が馬」だそうです。度重なる挫折を経験しながらも、ひたすら目標に向かって努力し、大きな成果を上げてきた、山中教授ならではのものですが、何処かに人間臭さも感じて親近感を覚えます。

山中教授が作り出した iPS 細胞は、あらゆる細胞に分化する能力を持つ万能細胞の一種であり、この iPS 細胞の登場によって医療の在り方が根本から変わるともいわれています。

将来は、iPS 細胞を基に自分の細胞を使って神経や肝臓、心臓などの細胞を作製し、病気や事故で機能を失った臓器などに移植する事も可能になり、難病の原因の

解明や治療法の開発にもつながると期待されています。

ただ、この iPS 細胞は、山中教授も述べているように、まだ基礎的な研究段階で、実際に患者に使われるまでにはまだ時間が必要とされています。

かつて、参議院議員の蓮舫氏が、スーパーコンピュータの研究に関して、「2番じゃだめなのか」といったという話は有名ですが、今回の山中教授のノーベル賞受賞を契機に、基礎研究の分野に大きな光が当たったことは良かったと思います。

iPS 細胞は、再生医療の切り札とも言われており、世界各国で特許競争が激しく行われています。こうした状況の中で日本が勝ち残っていくためには、研究分野では世界のトップを目指すべきであり、将来を展望した知財戦略の下、基礎的な研究にもっと力を入れる必要があるでしょう。

山中教授が本当に欲しいのは、洗濯機ではなく潤沢な研究費だろうという事は、想像に難くありません。(塾頭：吉田 洋一)